草縁集 一

へ 2
1059
1

天野政徳大人輯

草縁集 十二巻

東都 耕文堂梓行

利門 1059 1-4

久かたの雲れ上の古よの葉をしのひ。
縣居の賀茂乃翁。志の武蔵野の
江戸の埋乃邊にていされたまし
古学乃道世にひろまりて。その
ゆかりを志ふ人いとおほかり。
おのもかくはしとうかゝはしとを
得てあまたもとりし言のはをとりあつめん。
ひなくさの友とせりしもて。や其余を

ゆゑしらる。高田の大人の記せるは志らも
をしきはおよそたくみならましたれ。
縣居の大人は古語やうふんをとらえて
我からしう清らに雅なる。大人の大人乃
けせかくられいしいひなふこされ
きたる。爰まくよきあひはへのりと
まさ絶し。此大人たちの云の葉を目よ
見耳よ聞よこれはそおけれる。

せいく敎は世よまさるとおれしへて
世の哥人ともちのとをとく書くは
つしほくよひ。とつのさしあふく毋の
とふ志ふアよぬこ。いもとも星なしのかん
のならう孫と。歌のよしあしともはし
せん敎のおほきにくあれもいをはなれ。
人の歳おのまゝにさしたくなれいはく
おく。さ海てなき人のもかおいさいは

おほくとりのせて。しどけなきことなり
そのしなは。此草子よりまへはさまて
おもむき。かきわく作の品さだむべくも
あらはれなん。まこと古今の部と文の
部とをそしきんをとりみそへは。長歌は
いとかくきこえさふて。おのれもまいらせん
しつね年によるよ。すきこいふもあれは
あるとも。されはのふかいやうはてしろて。

ゆゑよくに人はるゝのあまとは。その續はそのきを
としてえん人おもひまいらせんとよ。
文くしき色を賀茂の御織錦の御。
おほしきて教さとしはましおほくを
かし文よはなひおつのみやひ詞を
はしり里なかせあれかいかし一のさまゆえり。
れうしふいは論説辯考解辞問對序。
題跋記傳雜著なとやしなくきくの

けおもんあるとその名ゑぬとはたとへ
錦とつゞり。玉とは庭訓しとこゝれ。
そハ撰さしめんとふハあつ経とおのきゝ
名よそとのみおもひしめんた軒ヶある也。
此くハしき事ハ。高田此大人の文跡
辭よいくれ出るとみて知見し。柞
此さしハ武蔵野のゆかり出しと
人出ちの言久傳おほかれと出てさし

ゑん集とうハ梅みかい濃事。
机のかさへの友としあそしまつると。
梅み此林のそとのこゝ板よゑらん
出て。あふかちよほまとしむきて。
ゑいかひそそれしてしゆる拝せ
はれハ。文政二年といふゆるし乃
氷世月をかりよこそ。かしいふハ
河つ海のしゝ和のゑらとふ津らく

まりまて。葛飾里こりよきて紀

天野政徳。

草縁集目録

卷一　長歌部　春　夏　秋　冬　雜

卷二　短歌部一　春上

卷三　短歌部二　春下

卷四　短歌部三　夏

卷五　短歌部四　秋上

卷六　短歌部五　秋下

卷七　短歌部六　冬

卷八　短歌部七　戀

卷九　短歌部八　雜上　賀　離別　哀傷　羇旅

巻十　短歌部九　雑下　俳諧 折句 物名 旋頭歌

巻十一　文部上　説類　辯、考、序、

巻十二　文部下　題跋、記、物語類　草子、消息、雑著、

作者姓名部類

（イ）
今堀磐根主
池田貞時主
岩田政方
岩上とさ子
伊藤徑
石原正明　尾張
石原周朝　上野桐生
石井詮方
石井隆豊
飯田雅朝　相模曽我
飯嶋完早　下総太田

（ハ）
馬場長英
馬場龍彦

（オ）
大小澤啓迪　甲斐吉田
大越通顕　丹後田邉
大澤菅美　近江日野
大塚宗輔
大塚宗敬
大塚満之
大久保利庸
刑部國仲　甲斐吉田
刑部國秀　同
刑部義樹　同
刑部城霍　同
刑部穗並　同

（ク）
月江寺曹源　同

羽生田貴良
服部菅雄 遠江嶋田
芳賀春木 下総太田
畑野永能
般若院古道 三河吉田
羽倉信美 京
林久義 信濃松本
林惟重 相模沼代
濱田孝國 尾張名古屋
長谷川順 甲斐[illegible]所著
長谷川乃子
蓮池水枝
(ホ)
堀武陳 相模小田原
北條時鄰 常陸鹿嶋

倉賀野直賢
(ヤ)
山名義隆主
矢部常安
柳井勇雄 相模小田原
谷中葛民 信濃松本
山本れう子
(マ)
松田政敏主
前田勇老 伊勢
松島憲善 美作津山
松本恒雄
松本可貞
松井矩雅 相模小田原
松井原相 美濃竈村
松井柳子 同

北條遜子
星野貞暉 上野桐生
(ト)
藤侍従信徳朝臣
豊原武秋 下総太田
鳥居和方
鳥海恭
戸田亀磨
殿村安守 伊勢松坂
友成貞民 信濃松本
時風 下総太田
(ヲ)
荻原徳風主
岡本定彰
小澤直温
荻山貞行 若狭小濱

松原茂岡 下総太田
松田それ子
(ケ)
玄信寺養阿
(フ)
藤原政美朝臣
藤原好秋
藤谷倉持
藤井勝 上野桐生
藤木千並
古澤知則
古屋宜風 甲斐上塚
二見景敬神主 相模二宮
二木正音 信濃松本
二木正義 同
福泉寺智雄 相模沼代

萩山菅子 若狭小濱

(ワ)
和田蝠翁主
和田絃道主
和田以せ子
渡邉重名 豊前中津
渡邉守邉 信濃松本

(カ)
川田守邉 信濃松本
加藤濱子
片岡寛光
神田有信
神田張之
河野正美 石見濱田
神方朗儀 信濃松本
賀茂季鷹 京
糟谷春雄 若狭小濱

(ヨ)
吉田世綏
吉田総義

(タ)
田澤仲舒主
谷道好
高田與清
高井宣風
高井八穂
高橋有修
高橋石足 甲斐门口
高木たか子
田中本孝 武藏小山田
田中直利
田中大秀 三河吉田 飛弾國也
田中為政 下総太田

(コ)
小出重固 下総古河
小泉包教 相模千代
小泉道賢 相模藤沢
小林應章 信濃松本
小林烏知麿 相模深見
小林満守 同
小西惟幾 攝津西宮
小竹茂仲
奥徳院春登上人 相模藤沢山
駒井つや子
小嶋てる子 武藏八王子
小嶋言行 信濃飯田

(ア)
阿部無尽 相模藤沢
阿部ちけ子
有賀長収 大坂
青木承
青木厚
荒木武文
荒木翹之
荒川今樹
天野政徳
秋山光彪 豊後小倉
秋田杜風
安喜俊統 信濃松本

(サ)
斉藤彦麿
斉田政廣 丹後田邉
西藏院知道 武藏南畑
西念寺鳳山 甲斐吉田

田中為充 下総太田
田邊直使主 甲斐吉田
田邊芳樹 甲斐吉田
田邊ゆき子 甲斐吉田
田村此雄
竹村茂雄 伊豆熊坂
竹内直躬
田澤日曉
瀧山知懿
瀧門齡之
(レ)
聯芳軒遊阿 武蔵野火留
(ソ)
外門浪音 甲斐吉田
(ナ)
奈須巖主
内藤重喬 武蔵小野宮

西郷元吉 信濃松本
澤近嶺 下総取手
猿渡盛章神主 武蔵府中
(キ)
木門いせ子 石見濱田
木根加代子
菊池袖子 伊豆熊坂
(ユ)
湯門せい子
(ミ)
三井高蔭 伊勢松坂
水野真虎
峯尾數臺 相模押切
宮本盈子
(シ)
常念寺宗選
嶋岡いつ子
嶋岡まれ子

長濱之直 相模小田原
永田雲梓
中田政辰
中山美名 三河吉田
中嶋みつ子
中村祐見 相模曽我
長尾景寛
(ム)
無量寺惠全
村上真澄 石見濱田
梅本政養
梅本政明
梅原たく子 武蔵八王子
(ウ)
優婆塞霊玉 上野
上原建胤

十玉院辨匡 武蔵南畑
(ヒ)
一柳春門 大坂
一柳大蔵 大坂
平井董威 武蔵井方
平井光敏 武蔵桶川
平等院一道和尚 山城宇治
(モ)
本居大平 紀伊和歌山
本居春庭 伊勢松坂
森田寛長
門馬永胤
(セ)
關岡野洲良
關岡安躬
關岡邦真
關岡妙貞

内山在雄
宇治久守 伊勢山田
潮田流阿 下総古河
(オ)
大石千引
大石千世子
大神常久 伊勢
大羽幸雋 丹後田邊
太田貞備
太田常之 筌間
大小澤啓行 甲斐吉田
通計二百十三人

関根れつ子
(ス)
数原尚絅主
数原ゆや子
菅谷正之 武蔵野火留
砂川信一 武蔵南畑
隅田定保
鈴木長温 相模戸塚
鈴木與叔
鈴木基之

草縁集巻第一

天野政徳 編

長歌部

春

詠呼子鳥歌并短歌 景寛

櫻花咲ぬやせんとおもほれむ都大路にさひし春をさかりて
わへをゆたかにそのえんとおもふ君はくもしけれど、つらきともわすらえて
人にみゆはかの枝にぬかれてはゆみつ行ゆきみれはゆたかなる山人
さりぬ、やましらぬせきちはいかてまくへきをやはしひとをれは山つみ
わとしくたまかつむかつともの雲のうちにふく鳥すかせはたれといひ
つちをのさあてをはかんしかれとも又なとしともかれにはやかをもたる
わみんとて見つれ山のつかさにぬきなれし八年のまよなく鳥よよするをと
やまてうたつる山ひこにたつねてまよひかれ[illegible]かへしまや

夏哥

よろこびはみちにまよはずましかうべをたれぬ恵の心こそ

菅原勇老か庭の桜をよめる　吉隆

これや世の世をさかゆく常人のさまをけふも紛ふ花またの咲ける花も紛
忘れとて侍らしの天は時むかふところをしかも小垣内にはすてならひ
けふのはしに竹をひて忘れざるいくみ竹いくとし月か経ぬるのみや
ひれはなをたのしみ竹たえにまつせ梓弓もちてやくれはもしくされ
花はさけとて花のさかりしは百くさの花にまさりてよろしく
まくもしけれは末枝に咲出る花はみやひとの世にたかきものにのをわ
なちまちのほるかね中枝は咲出る花は人みなの紛ゆえ花くと
なちとまやあつ花みるかね下枝に咲出る花は古くもかくむかひみる
かねつ為たまひおかしたまひてこれ花のさかのさかやは貴さくに
えにしとかねてかはらくにめしまにまおもふきち花はわつとひ
てしくれなちてえるてうん言おもひをおもひしては花とある
てうれとある緒のりくつちかきたてるひとをくにくらしつ

夏芳

みそのふのさかりハなかとれにたちてうんみてんみれとはかなし

夏

灌佛をよめる　春門

佛といふ称は梵語他国の人のなよむくし花弥はやし花弥となれよ
されこれのやまとにきさらくかし国おくかねして陳かさつくりて
そろくとなれくはいとすくはやにかしこき天皇のみくにおほせて
寺つくりはいつも花まし ゆくみたのところかむかしのめでたき聖徳太子
わて麻衣かたよまかけるのかみにつかへまつれる人さまになやみて
ゆけるそれみちのふみしよし祝言の世にひろくわか此称のさかしく
なつきみするもてるれりしめの弥月たつ八日には百種の花つみ
かつみ須彌の蓮根を花かさやかくろせてつくつて為に為なくくさくしれ
よれしもはけあまつしとにひかしてそれ中に清かたをたつせ
天かける龍といふ称のふみおきて奉はつるそれかそのうふゆきとまねひ

かしこくみそてそゝきて法ならはいはつとひて山蔭に鳴なる鳩の
法と急にはなれとよもしき見鶴と年毎にとゝめていひなくをにさゝけ
よみはけ生死れ毛から死をのこともかをもるてさきせわらへしこ
れ鉢のをとしへ見はしひきのやまさかしいそかねのゆるひしなしハふち
なひくいさくむなけいさかハはらきにそれたれけとそなかハたゝ名と
いかなれる世の人みなの世みちに京くまもひて凌江に穏あふせる大舟の
おもひたのみて玉れ鉾の路て此後のことをしもせめてこひれこけふ
そこの法はれの日とて国は祢わまつわつかする鉢園の迹すくそは
はやしかわけれ

反歌

まつ人れ鉢のみあれをけふまとてうゆくくるくしきおもかる

詠橘歌　野□良

はつ玉れ来経ゆくとしれいくとせハうつやゆくともかはらて なよなれ
そゆるとまつ花にこゝ吾はひし路ととむしくれかくれてぬれにをそれ

さけくよろしき花のかくもしき花のまにはれやなれるる実ハひかりてる
木の実めてたれん玉にはわれや百枝さしさけるそれ葉のしるし
とつてとことはにわれやときはしくのかくみれ木みれハあやにうるはしくめし
はやはしくもし

秋

秋歌并短歌　春登

花のふることすゑ手向をわしらく人の世ハひまゆく駒のとし月ハいつるまにまに
かくなとしきに今まれ山にあかねてさて稲をかくまし花実に承わ
ぬれハくかるの日かけかしこみあるかねれつちさくさけて六月れなくね
はつきくしゆきのふみれニ夜れとくさちろにたゝくてかくと井くてを
えつね去しぬ世れなかしとてなき縄まつる七月れ兼れそとゝ花
吹風もたえとほしく秋されハ洗ら田畑れハ末穂のたわ穂れそつき
先みえていそかみてこハ鉢にけよ妻れ子とも一妹とせもなかつさひた
そひしろたくれたはきをもかけや花纒れとかまたくよ花や稲たちろ

とたまくらにぬるよるの螢とよぶ声にいなかにこころをひきつらてさわ
ぐ声にかなはけむかなしよもつかねにさひとなきしきよの縄
をかつけて我のりしまなせてかへるなとせてみちをきくにいさつなの
いそしきいきちるれなとしき我へ旅の我のうさちなかむさむくし
いたつらにもとしのちめるやきしきをきえひろくゆる時におもにかな

反歌

まちつとれかる時にめさくちるれてにおりふく急のとしむさとひと

冬

詠枯野歌　定保

山にふくあらしはおひろくはにくそしおにみちぬれるの山のそのわさ
かゆるともへにハ毛の荒のうの山には毛のにくとのこまかくにさまを
はみけわそのはのしをのそくひよのそのひろとれるを
たくれをきれ狭との時自くれひれふかはるよ時もちくとかくしにたれ
さへは山にあやけるるれをゆくしかと似てしいあしにみゆれをふるるのおもを

みれハさふしくとねにけま於てにむさわとちきるるかたちく我をとひろ
ころかせるえまたかたへれもに我くまわさむみまわりしれ時にさひつ
ゐかれてみしく我おけをれへとこそみしくひくちく子ふかるを

雜

恭賤奉備

華頂大王之電覧長歌并短歌　與清

すわかちく君まれ國のむさし我の江戸の大城にまつわことまをとし
たまへハにめるをの御世のまわきみてくるるをよしみるにたかさくよ
御法の花を流たよひきよしたまてるはあらしひくひさかれるありの子まよ
くうたひちいはなきて風の花のとおもくいそましとろしさとにくひ
またさんいさふるを我おみめくこにちかひちのかのにしはゆめこれの
身とあるるとちくうれしけをんたしひに今の世さらこん世をか
くて御佛の御名をとなへつはおかくまつるらん

反歌

いまは世をそむかしきてひむかしにありしをとこなりけん
　艶はくゆあみにゆきけるときは金の国山にのぼりて
　十国が峠とてよめる哥一首　寛光
東根さしは今の国山にのぼりてみればはこねの下さの山
ちらくやうる伊豆のとやまはうつ山と出さひきしてはれわたりては
たちさかえはるかなるふしの高嶺は天雲にたかくそひえてはれ
ぬる時は弥さひいましみし川はいやときはしろくきよらたくはぬめのまく
しこと山はまゆをなかなる清見潟みほのはさきはみそおはる
は浦はめにきこえてなかせまくとく浪はへにうちよせてたゆるひ
天雲の向伏きはみたへたる大海原はやしきちをまたちかけは
白妙のかけるなしつゝかえかへるいての翁はいそ潮はみどわれ飛の
浮出てゆくへるなせわあしおりや翁の捐は山にくるくぬはゆきかよさ
けるあし篠のいそれくたけてちる波はいまつふれるをとる海をわれあ
やしきまてに浅山とひとつにつねくにしをひとつによせてみえて

たしみようろしき山そはかねは山これまろ山は
　筑波山にのぼりて夕つかたふもとにくだりてよめる哥 并
　短歌　素麿
衣手はひたちの国よしはふむとつくは嶺の二上にのぼりて夕のかくこそ
むれたてるいそやをつたひ枝かえは枝ともちてやくしそのかくこそ
はおもるその広をふみわたかくはその枝をそわえたかたはいかにわかなき
ちひろの谷はいそかすに身をそくおんとうつそみのいのちたえん
をとこは山をとうしもく神のくはもしき陣屋かとわいたるはれをわ
とゝろかすつみなくふもとのさまにくたわつるかな
　反哥
ふもとよりわかへわみはれはくろくれはなちてあふつるをはくもれ山
　詠酒歌　野洲良
かく山にあつはおひたる吉野木をとねこしにこしてやつえにさゝぬとか
けあつえにゆかしてやつ枝に猿をとかけかけすくれはなやにかしこき

はじめころの都の御世よわ大難に挟名田の子ねがえしつて白河院
源とも法師国つみ都にすむし人みたさふれハくしの都とさは
にいまはいそたは歩くなき都のとして茶をとかくとはかひ
たまきたかしきかしられたるてかそけくしつむ人をとまらにな
しもやすく人をとやさしれるのたけたん人よおくさしあらかし
やかられむつひあふ井をとたとめいそひてといそひおわすあちとせ
おもにほきたしもしてたちそらとやらてにしたけあらくにはそひ
ともんしいにつよ今めをとつゝに人みなのかわすまれそこれの
とよみた

むかしめれたつとのよやおちてたえ入けるかやさなとくつきた
けれそもろこひてよめる子并短歌　千川
麻のしれれたつひさわ子とはしたよいはつきかしつきゆふへにハかしつた
いそふいそひ子れいそひとまよあハ春の子のひさまあそひはとこ歳にのた
らひあらてきまつくハはやけるをれをいまつとてそこにうすまたせる黄れ

根のちゝくし階いろたかて下らん時にふたれハ八千縁のつ日の末の都
の都のあらひにちさをゆくはしかみさつしまさかさまやさかにはする
それそしのうつわおきぬなる都のかしこきおさにおほとなえにあやと
えきまたちのえの文なよそしわ枯葉の母たゝきまよひかおむた
おもんはくなと春こむしたとれこころをいそみはひろのこなつるよなわたる
なかに春をみとまへさし莚のよおわの人をあれことよひかはわむてゐ
たれのめとかよれあまとそのよりして妹のれふくますひ寂しきれけめる
哉てれなつかしきよいそたそみけハくるたかとはやしおろかに大直日直
日の都のさたくるみなまかしこみぬさ玉のよみちかへりてあかし
ことあとやほしみしくいさけた床なよつあはそくゆあにたれよろ
こひにこそよれにくとあきくるをとみれハうれしよ

反歌

禍津日の都のあらひと大直日の都のなをれやるよしれかしこそ

郁子園小集分題得代貧書生述懐似歌并短歌

寛充

天地のうちへ生をうけてはれ出る中にいけるものゝうちに
人ハ八百万のうへにたちたるものなれハ天地のめぐみをかけてわすれける事に
かゝれハ身をうけたるにつけてもまづよに出しことをしらずしてあはれなる
高御座巣日の神のめぐみと父母の身をさへまもりてたま
さかに人とあれきゝて国をしらすにあれどもはかなきまの国にうまれ
かれとものこれのみくにのかしこきあまつ日嗣の朝廷と天下を治めてつかへまつる
大ますらを門の城の内にちかくさぶらふまうちに年久しくかくてしろしめ
ハあまてらす神の御代よりつたへてしらしめす御国のうちに在りく
まくまもりつゝきこしめしてとこよのつねにすこやかにまします
みまくおもはせたまふかたなきことを恐れみてまさにかしこみ申す
其かくのごときハかくやうに忘れたる故なれや身はかなしく
たとへ竹ならば世にある人の心をもて此世の人かはりなくみ
行くゑもしらずなる行末うれしき事を身にしめて今の後の世にはなれつ

そくそくしくあやにうれしくかめのうちにおきてへあるものは山になく
なる鳥は秋の空にうたひ虫は人みなの耳にちかきたぐひにもはかなきやうを
見つくに人とあひてかくれたることをしれたる千載はよそ人をうつして
まさにかくしてしれハあさましきことをいふ人たるまゝたよりてへはやにかたくも
くるしきへはうたひしとかれどもはかなきさまをいふかたちはあはれ
みれぬくる世の景気にたちておもひによきことをさしてをの父母の教をしく
よれとはさけれむくいとなすべて世の中はかくてやくちんたる秋の
むしにあはれにこゝにおもひて

夏云

精湯くみしむかしの事をひくもしかやうにくもちかき世とハるかなし
世のかはりになりしてら父母のめぐみのひろきに手向はむくいん
よしや身ハかくてみるもおやのあはれをしるまでこゝろのちかれ
まことのおやの神をしらずしる車門にたてゝはやましきおもふことを

源氏物語をとこゝろ

太平

すゝひろのもとちれ出るはつくれたてる梓のさひさしてこゝろとみる山
ちよ経れそのくさしめのまくさしくつくや出たる白玉のみれひかりの
縁の君かみやひのかたやをかたやつくるとれさきたれおもかけことを
またくしれ世のことまきこよになれいひとてつけよの中の人のこゝろれ
おくふかく八千くさおちにねところにかたあしもそれらみとなれお
かたまさくわかくしよわよたかれにみゝる人のみてくいかしくき
くくれおかくかなしかくたかわあかなる文はときしまれやまとはいはに
文国のかられくにまゝまたくひなしとてておけ白玉のみかたよふひて
紫のふかくとふかくいやたやるふみれこゝろをおほろかにみやに
にてなあしひもねのもとちれ出るつくれたてるこゝろのつもるかに
よまれてよみてよてれれいやすを

草縁集巻第一終

草縁集巻第二

天野政徳編

短歌部一

春上

年内立春

月よみはふたゝひなきにくるかはをもちかさねてもこゆるけさの姉　政美

古巣出てたけやらくひはさしおちもたるとも去枝の梅さきにゝほ　千引

ふゆつもし山の雪はそれなからもしおらちよわかれむくるかな　常之

立春

おつるはとろしまてもたちみなくひまの霞やのわてゆくつ春　與清

たまくとしてねまさかるし横くとれにちゞやくるれはすてもたるらん　一道

通題

新はにうけてこれのけふのし梓弓たるはたちとえの梅のにほひに

のどけさとつねなる世をもかつくるの千代めくみみせてかはいさかれ　子世子

江戸立春

みやこみの竹つまれこゑもかつくるのひかりはるにたるくやはしく　與清

元日立春

ふるとしへむ月になるになつかしきやし治のよるにかれみなちらひく　茂岡

立春風

秋津島にみなかつ風のけふのとけくて枝にそよきぬ大御代のなる　與清

立春霞

梓弓たるたちぬらしこる国のやまのこぬれにかすみたなひく　利庸

元日

鳥の音に車の音の天の戸をとさるにゆくゆくけさとをける　寛光

すゝきぬといやわらくともなくそめつる川のみ水にひきのれてこそ　景寛

ゆたかなるけさのところにひさしものみなかよさをはいつそちてまし　八穂

春なかけさしのにふるにはくるゝよ井手の水はたまとなるまとしみゝん　柳子

よしのさしのめに

うたたね子のむつしにたちうなるさはそらかつるさのにかねにけれ　寛光

花の色にまのかくるそふくるくれはとときにいかにかれしかはなくれ　千門

ことにたくれたくてみくてかつやとにまそとむかる御代そなたとき　ほい滝

春風春水一時来

山川のこゝろにかよふけゆくみなもにすこしゝそへてなる風そふく　定保

春風不分所　信美

おしなへてやまともろこしちる風はふはまだしらぬ佐川そなき

早春霞　守邉

さるをたにいひなくぬえぬれかはにて世事ハかはらの花わかをとそこし

かつしらにほけるさき年去年ともいへるとも

千门

さきみれハ細つかまもたわかつしかはかさもるやうししよ

早春鶯　大秀

ちまくはふらきえれさけしきのくもそこかはめるまるれはしわろ

早春山　春登

ねはさかみしれそれのかくれかまえにかすみそめけるとやつくのやま

関路早春　翔之

いつもはれひかれとわかは東路ぬかにはし関そとるにはけぬる

早春水　完早

いはさやんあなとれて出はにちわちるくるかなのやま川れとつ

早春海　盛章

佐渡やかはむかしなの出きつ波かろれこやとみまハきぬし

早春浦　安守

なしぬれひかわをとそくて玉出の浦にしたくるまのおししなみ

野早春　大平

はかけさにはしなのをられ村きこえにもまみそそむる霞れしたる

早春鶯　野阿良

いつしかとまつにこられひかれしとはふみそむろねれめくのうぐひす

初春鶯　流何

うくひすはふくるにくるとたてつらはとおふまる身れこかは

初春待花　久我

天かなのさるくるもりにもまてはまたきみ山はゆくころかな

有信

さほ姫のかすみのころもたちしまはまろしぬきてをれ野かけ　景寛

家ゝ祝春

にきはへる春はといへるやまひもなし　めでたくひとをあふぐひかきに　伊勢子

雪消氷又釋

鈴きよめすゑひさしくしてみのかしこころやすくきぬるはきれにきぬ　長英

毎山有春

山松の香はしつくに折くれしと軒のつらゝはさきにとくらん

風きえしゆきとてかひに何しやらつくさの山にかすみそあかるれ　野洲良

初春草

さくらかせのけさ明かたにとほにほゆるされかなにみゆる庭くさ

さくるのそしめ子きともとやて　寛光

子せ子

子日

いつさかふあさまきまちひの拾はほところむこまれなくるかしきちな　安守

ちらしぬちとせのあさおもふにひくるまれ人ゝのつきし　與清

千むれてみへてゆきまの小松引かやかやくらし初子いさみける　啓迪

子日松

むかし誰かのひめこまつ引そめてちとせのあるめためしとのらし　一永胤

ねのひするところをみへたゝよは玉ねまつれみよのん春もまちれて　いへ子

みな人はさるのことさとなとそやまつまつところまもひかるらん

子ねひする露にいたゝて　言行

初春のちつねれこまつ引たゝてころのそせとまたやみてらん

むつきたつ初子たかにけるもし　野洲良

子日祝

けふこれはかきわたしてふなとるにれへの小松ぬいきくらくにかな　翔之

うくひすはねのこまつにひかれきてちよのはつねといはふかな

霞　景寛

なかきひのにほひ出てそふれゆくそらをみえしはるかすみハ

野経良

ちるきしにたなひきぬる人をそれもしやあけほのみえし春にたなひく

曙霞　菅雄

ねくらかるこゑやまかはにゆきかへかすむおもへはなかめぬか那

朝霞　周朝

松浦門にうちよせし玉かあまそてかけみるゆめなるる朝霞らけかな

夕霞　春門

みなせはゆくれしたみくれてとよしひかれむ山かれ里

山霞　重喬

大きそはみゆきなかれたるたちぬ共なしときそれ山にかはみて

真澄

ねさらけこゑもみえにちさめしかはみすれるらすやまたかれはき

霞隔山　應章

いせをやまさくらいろとみせそめて山のかつらたつかはみかな

霞遠聲　俊統

さわひあはむれはかしやいはかはかすみたるみよしのやま

野外霞　是温

むさしのはみよりつくく秩父嶺もさるはかはみにまかれさわきや

常久

霞消てそなれのつかまかむかれのまさ人はあをしけりのん

高蔭

としをへてみとなわのてし涂それ里とやつれにたつかすみかな

野径霞　弦道

けさははゆきかふ人の袖まてもかはみそめたるれへのさとちかた

海邊霞　大平

みぬ人はたにくみ浦とおもひしをさもくやしくかはむはちゝ　完早
こきゆくれかへるはとゝもにあさてかはみなとさるはまれつかな　政敏
またれつる汐せさるかなみまたせのかはみなもうかふあまれつかね　満之

霞中鶯

春風もこゝろやとくし鶯とれかすまれうちにひとく啼川せ
房風の気にかはみをふてふるにの人ゆか　寛光

鶯

おもひいつるふるとのみちもまかなくにかはみ啼けさるれ山かせ　千川
ひなはらにさるいろゝとふせにほてなくねかすたぬうくひすの声

鶯告春朝　彦麿

呉竹のそのふまきなくうくひすはみかきとゝろみれ時やつくらん

待鶯　原相

柴の戸はまちそまよふうくひすのきあしまつはやいそかすにはる

朝鶯　大平

はるまちしきけとのへのかつまれつるしきうくひすの声　周朝
いとをやとまるきたにふれとおもかはみなちとれ梅のうくひすのあかく

翁家鶯　重固

おもかはみかへるとうくれ梅のをかしあはれにまうくひすのこゑ

鶯馴　安守

梅かえにかよふれきさのうくひすとふなれつとおもひなるかな

竹鶯　與清

まちてそなむおとのさまかけよひとくとなれ竹よろかし啼

庭鶯　常久

たかたのせれのまけさんやとたりしかつしるを庭のうくひすの声

山家鶯　大平

山さとの軒のたるひもとけてなみだかゝるうくひすのこゑ

　詮方

やまさとのかけひの水もおとたてゝうくひすなきけり

名所鶯　龍吉

うみとなんなりきこゆるひともゆくれぬやどかせやまの鶯のこゑ

若菜　喚清

まろふまで法は残れ里かたつむ袖ハつゆそかゝるうくあさみどり

　在雄

はる雪のふかくてつむかたみもなしぬれハそのまゝかれ

　のゝ

うちむれてわかなつむなる野のみかけのそとまてまろ人

澤若菜　基之

あれなるは沢のこゝろもしらせてつむきしかくれて根芹つむなる

雪中若菜　浪音

野はきえぬ雪またおかるみそのなかにそれとみえぬわかなゝりける

　孝麿

しめさへしまかたやいつる若しろの松しろしまかれふれるしつ雪

　寛光

里かたるむ母八なるなりしすゝしろの松しろしまかれ雪降つゝ

二月なかの十日文國の吉田の里なる田辺ぞ知るかな家

にてまれは降なれは　喚清

きのふまでかれたのにどみてしかとけふハあしたにきえしきのゆき

沢雪　通顕

本かくれのやとハきたなりしくるまてもかつめしゆきたにれてるゆき

谷残雪　政辰

さる風の吹ふかれとも雪ハまたこゝにきえのこるなかけなし

嵐吹残雪　長英

むさしのはくれなゐきにかすめどもまた雪さむしふじつくば山　芳麿

故郷残雪

ふるさとはたゞこゝもとめしほどゝけんさみのまたふかれる雪のむらぎえ　景寛

池氷猶残

池の面はそこたかよたなくかれやれ来れあさいはこおほにそしる　大平

餘寒

きそよ雪もなほひかれぬきさらぎをけふ寒さにさゆる山かぜ　才収

餘寒月

さえかへるゆきけれくものたえだえにかくれぬ月もおもらる雲　朝喜

風さむみえとりのそかはまぬはらをかくる月のとほちの　明儀

梅

なかひきれ山のをゆおのきえぬまはみやこんさむさむる自　奥清

ととらかたのそれし梅のえだにあかまたおしらくそこちにかはかそ　千引

かくたかやかなもちらぬ家やまにをさく梅の花のあけなきかな　辨匡

垣ころはやしくてん梅のさかにさかあらまねよにちょうさる風　杜風

梅盛

かくちかかふるきいろをといふにしてはるのふはは梅の枝にくらめる　李雋

紅梅

小菊梅をとまけしはきみやそのよにひかりによる梅かをる　春門

折梅

うぐひすはよかわてかざしん言らくはかくれいとてん梅ぬすびと　安躬

梅薫風

夕ぐれかつる山ちれ家つとまはととるまゝ袖にかよふる梅か香　大平

さく梅のにほひをしめてすむ庵のゆかしくかをるまどの風　長英

梅花久薫

咲きそふ袖にうつりかやうつるとて梅ゆゑにこそ風もまたるれ　武彦

とふ人のそでにまちしとかさねきてうつせとつきぬやどの梅かゝ　元吉

梅花薫暁袖

まだきおく梅咲ぬればなつかしきねやもかけて袖ぞかをれる

暁梅

むかしおもふまくらにうつしてあけぬ月のみかげとゞむる軒の梅かゝ

夕梅

夕日かげくれぬといそぐたび人もとゞまりてにほふ宿の梅かな　吉澄

春庭

野宿梅

ゆふ風のあかぬ木かげにたちくれて月もうつろふそでの梅かゝ　千引

みつかきのいにしへのあとゝふ梅さけばいまのまどにもかをりてあはれ　定保

水辺梅

夕日影うつろふ水のながれにて梅がかほりきぬるへのさゞ波　元吉

池岸梅花

はるのいけにうつれる梅のかげみれば底にちりしくはなぞかほるなる　洞子

月前梅

梅のさくはるのかをりにまよふらん月にてかをるよるのまどの月　仲舒

かすむよの月にもにほふる梅のはなおもかげにこそ人さそふらしき

むつきさしめつかたまどべにちかくうゑてかほる

しらぬ梅の花にいきて　子引

二月十八日雨のふりけるに

こやひとりはいさよひきれて梅のはなのさかりをとふらん　明儀

ふれこと我よりまれども春雨にかれて咲みるへきなかなかや

梅のさかりにまかりて人と物語して侍りし

春麿

梅の花こゝろにしめしゆふべにそうつろふ袖のにほひやはかとおもふ

高蔭

山家梅

とふ人もなき山里にすみしよかなにほふ梅かな

安守

ふるさとのきねの梅のにほひはたちかへるともやさしるとききたまし

宣風

閑庭梅

梅のはなきえしものかはうくひすのかへりてはちりつくすかな

元吉

さくらときちりとしもやまくしいへれらひとつれやどの梅が枝

千門

依梅待人

うくひすはなきてくるとも梅のはな咲にし日より人ぞまたるゝ

かくちかき梅咲たりとつけやらん人つてきくはまちくるしかな

景寛

梅の花にほひにあかぬかはのくやくとこぬ人まちてまつ

茂岡

梅近簷

こ家やどの梅の花ちるやさそひけんよそにわかやまうくひすの声

有信

梅の花なほさかりさらは木枯に色もとめるほどうくひすの声

勇走

窓梅雪封寒

うくひすの音に聞えよかなへしまちとさらむきうすれ梅かな

定保

梅浮水

なかれゆくにほひはかはれどあてもなくちりしく梅のかげの下かつ

道賢

梅の香

かきねにさく梅のしたえたかとるたなかねめる袖にちるやまれれる

春麿

二月雪三段会　寛光

雪とみてぬれしとかさゝぬ袖なれやとゝむる梅と花ひとつけにき

柳　備守

さほ姫のうちたれかみの柳とや春をとけつるとみせて春風そふく

柳條随風　葛民

ふくとしもまかぬはかわれさるかせもとゝにそせたるすゝ柳のはと

水郷柳　茂岡

はしひかくかにくの川まれかとのをむかしの柳のみつるたわゝか

水辺柳　大平

行門のきしのやなきの玉かつらかけにふきいつるしく春風

山家柳　野則良

岸やきしなやかてゆきとの軒のはなしく春やわとと柳

雨中柳　彦麿

さゝ雨のかゝれとそてまき柳の枝こきたれし　はかくもほるゝめ

ふる雨にけふるをみれはさほ姫のうちたれかみの柳なりけり　志け子

春雨にぬれてやけつるをとめこかうちたれかみとこゆる柳は　加代子

柳露　千門

そよくとふくれみとみたるゝ風に散くるたまかつらひくま秋

若草　寛光

みつれはこまやつなかんあかまたかくひくまん春めきにける

與清

むさきえのゆきまにそもえにけるわかな縁そしたるみそら

光敏

ふたくのゆきとほとゝみてたるみとゝそあらしたるゝへの若草

高子

まなたちてむくらきゆる雪まよりわかなえいつるかくれ若草

春雨のふるしるをみれはとかくたもとはみなわれにかゝるつゆのくさ　野例良

隅田河きしのやなきのやはらかにみれとくさはにこゑにかは　貞暉

春草短

さくらとはみゆきかよひ路のひつめたにかくれぬをのゝへのわかくさ　盈子

餘寒

よしとくそ花はちるらんいさくまたかさなる雲のまへにはゆきまつのくれ　勝之

春月

ちれはさく梅とさくらの中そらにかすみてにほふかすみよの月　野例良

これもまたこのめやさくらをともえわかん月のかつらもちりかゝるらん　定保

霞中月

ゆふくれのかすみの中にはゆるかれひかりをとつるもさかりよの月　知則

閑春月

これ見ん人は秋のよとこそおもふらめおほろにかすむかけをみて　敏行

おほろなる月もはなさへまとはるゝかれ見えぬこゝろ　鳥知麿

春海月

さゝなみの月のおもてにしれはなしにほひみちてたつ大海のなか　春門

春月暁静

梅かゝにかすむかきねはおなしての月もとかけぬまきれのかさ　章鷹

春月懐昔

みひとつはもとのみやとのさくらかは月にかなしき

草縁集巻第二終

草縁集巻第三

天野政徳編

短歌部二

春下

春曙

もろせ山椿原をつたふ鐘の音にかすみそめぬる春のあけぼの　季鷹

一夜ねしゆふやまはれぬあかれやはされさくみのちるれあくほの　安守

妹と家をきるれよかこつやはらひにいろまかれゆくもととみしかれ　與清

春雨

はしたなくふるさと雨にきさそれらひゆくされのへかな　光敏

なとかでぬ軒のしつくのつくとながめくるもるされこそかぶ　芳樹

風はなほこそさむけれとかにかすむかたよりくものかけて春雨そふる

朝春雨　芳温

ねくら出てさへつりそむる鶯の羽ふきは露に雨をしるかな

夜春雨　千門

こゝろとめてきけは軒はの玉水にたまさか落る夜はのさゝめや

徳風

春雨にころもゆるみてねたる夜は花もちるらしけさはかゝらは

暮春雨　久我

さなへとるをりにしあれは草の戸にそふのかちはしたるゝ雨やふる

深山春雨　芳収

ふか山こそ峰ころまかせむしあまもそのさめことをみなしれしおく

帰雁　野洌良

かへるゆくこしはたてねれ雲たちてかけみえきゆる春のかりかね

素齋

春かすみよるを待てかへるかりかねのなかなきことはしれはさき

其虎

みこしちの里にまちいてさく花をさへ捨て雁はなとかへるらん

言行

暮天帰雁　寛光

きのふけふいにて春門の田つらのかりはなくなくになを

くれそめぬるにやとかれかへるかりそのをちかたはなるしとや

月前帰雁　久我

ゆくかりは影をとみえてしかとそやまちかきほとはおほろよの月

暁帰雁　野洌良

ひとつねのさめしよりたかへるかりかねをさめし枕にきくもはやさし

橋上帰雁　景寛

春かたる橋にたかきみえしかと見えつゝかへる夕くれのかね

山居帰雁　西八

雁よなどかへりゆくらん花さかぬまへのよし山やまこしわたらねど　未庭

霞中帰雁

こし路の春の雁がゆくへの空かすみにきえてかへるかりがね　けい子

雨中帰雁

契りてもなくしかへすわかれなるみやかりの雨とふるらん　完早

帰雁遥

かへるかりかはまねく声の空かけていく雲ゐにおくれてきえゆく　春登

雁かへるなり

梅はちりさくらはまだき春中にかりかへるなり淡つあくるよの比　しげる子

呼子鳥

たれをかは待兼山のよぶこどり夕かたまけてなきたえせぬ　道好

野春駒

はなちがひなつけて家をとふこまはなくいかほどの心やまず中　陀こ

色ゆるすかれみじかきにたちひろと柳やいとのほそくれへの風かな

かくもある月にみだれる柳の影の糸してかな　春麿

たるくくとかすむ山まつの夕くれは詠ぬ月もよそにあるなれ　蝠翁

雉子

まなくしてもかなるなくまに雉子とはみえやきりなけくん　子川

櫻

さくら花さくにはあへしひとしせとみゆるしまぶかなてしばらく　おや子

山かげにほかみさらにうつろひてこまやかにたちはなれけん　八穂

糸櫻

さくる風にみだれてなびくのにおつる妹がまゆひきまれはさみだるかな

よしのの櫻をも井出ちりかけるをとみて　宗選

こよしのゝ山のさくらをよきく人はよくこゝよくやおくかくしらん　春雄

ひとし山のさみしきを

うちかたふく花咲ころはかりのはあらし山も名のみなりけり
てらさぬたひてまつひかるころさくらはなさかりを　徳風

おりひてよめる

花鏡よそめやさくらをまちかくはたていさくら山へよそほしかよふ　郭生

桜柳交枝

うちなひき風のつまたつる柳にいかてさくらは枝かはしけん

花　大平

かさはなを花とこそ見れ春はまた雪の下のふもとちりて　喜齋

いかなれは山かたはらに花さく梅の花は峯の雪かとさをのみを

風さそふ時はきてふみよ春やおかしおもさとかきて花のちるをと　宜風

ちりぬともひかりの隙にもれてさつくなきなの梢かな　子川

何しひきのおゆきさくらの花ひかりも花さく花とかれ　野風良

よの人にみにくるともなくともさくらの山へのさくらさかりかな　安躬

さきにほふ花のしのさくらちらむ頃みよ花のとおもひける　娃胤

山さくらまちかたるかれはことなくは花よりさくらに花さかりかな　水枝

待花

花は春を遠く山桜のこゝろにかけし花まつへかみねの雲かな　永胤

まるかのにたなひく山の峯の花のさかりをいつとまつまし　八穗

花故き山のこゝとなかめまてひまたしと世へハみわのしら雲　有信

月まてれつてきて花ともわしあんし又このよるの花ともまつかな　喜々麿

さみたちる心つくしにくふれハなおまつなよのまたれよみ花　政廣

雨中待花

さしさん花まつかたにまちてれてさくやとたのむ春雨れそら　真庭

見花

かへるさハまよふさともよし野山おくふかくとも花をたつねん　八穂

暁尋花

まけきつる山いくつのしくれて花にちかゆくたみれいハふかめ　喜々麿

雨後尋花

さくとみし花ハふかめかみさゝめれぬれきぬきさせし世ぬれしくく　寛光

山家花遅

まちれつるさくらとこれハ山ふとにまたきえぬる雪むらしら雲　国秀

分山尋花

またかなるをもひきとたわにて峰のまちの雲ふとひかれ　久義

花開万国春

よろしれのけ山さくらのこゝろハさくらにかわりもちなやさくらん　喜々磨

静見花

人とわぬ山さくらとの花ゆけれにひとわしつゝきき花をみるかな　貞暉

平愈ちにて静見花といふことを　子川

みるわたしん世にはまれ花する花ともきハこゝやさらしん春の花さくらかな

つる上見花　永胤

くれぬとん桜まけゆくん山さくらかはね月もれこよはまかせて

見花忘友　七收

こせちやとん人にくゝるとちゝにて風なき花けおとひとをなし

人〻花見にまかりけるとかくさはりつけ侍りてまかりけ
れハ来しつゝとて後れ侍りてまかれりと詠みて
花見にハ後れたるへてゆくさきをおもふも親まさとおもひけるかな　寛光

愛花
世の中のいかにしけき若緑も心にかれていかにかも花のちるらん　應章

翫花
さくらかりなかききの春日にうつろひて散やすかれとさくら花かな　常之

花未飽
なかなかにちるともみえぬさくら花かなへてよる春の日くれのまよ　八穂
さくらはなあかぬ心に世の中のかはれとおもふ心しらまし　春雄
ところところにちる花をみてにほふ世の移りかハる花の色なりけり　邦彦

逐年花勝
かくれこハ身にちまさるかの花のかはしその世ハ花にまきれて　春门

折花
たをやかにて人にこゝろやおもひかくれハ花もとりをる　鳳山

霞中花
霞たつまこの浦はやなかめんかはらにまかれてにほふのまなか　国仲

雨中花
やまさくら雨にまかへるかなしさハなかなかに雨にぬれてかへりかなし　とみ子
風たえてうつろふ花のさくらハなかなかに心かはるつゆかはる　まん子

雨後花
きれきれるこの花のえだの雨よりもはれにしき名残をそみる　春门

夕花
入あひのかねもきこえてくれにけりよそにちるかる　是寛

八穂
かくらんと思ふおもしろはやりに又まさる花のかけられ
さなや雲くれやまもかとさちかふの人めさとりにのちれ又くれ
茶
花下送日
言行
さくもちのかけよわかけにやよしめてちるをとかきわれそまりてかな
正義
花留客
かへらんといひつる人はなれよまてとまるのふれはさらひなかわ
寛長
夜花
さくら花なよるはみんとてこしれとねはかへれやや風ふかくらん
子川
月前花
夜はれかし月とさなよにおきまねつくいかいと多くと思ふふかさ
花満山
常久
みちれはまつゆれりてはつみはま雪とたえまれこゝもしぬさな

山花
八穂
みよしのの花はさかはいつれみもよしのの峯にみえてみよ井
政廣
めにかけてよめくし山はちるらんはなくて桜はさけるもおかれ
深山花
與清
おく山はまなおくと花をかなひきて花世は風のかてさまくかれ
遠山花
彦麿
よそにくよれよしれなりみゆし人なくはやさはいつし花はさくらくらと
はるし山の花をまと
霊玉
山はなのあらしれをはうつれてのとかなかるをあめしらくな
それへいきみるに峯出は弥なるかにみえて心まの
恒雄
峯花咲かゝれも
ちるたくのふしれは衣をとめうしにまかせこうそ山さくらかな
花は衣の中に
義隆

よしのはれハ雪とさへにかほにほふ山のさくらのたけなの　好秋

山茶似雪

いつひきの山のかけをとやとしをへていくまてなほさかりかれ　子川

山人のたをりてかへるをちみれハさくらにあれやしらくも　完早

さつきをふる花にかゝるにほかなくやさかりをそへる花のくもふ　宣風

園花

くもとみてはるにしらぬとやかれハちるてさくらに山かせそふく　在雄

池上花

こゝろ人のゆきかけとかへるなかにもうきしつみのさけハちりかね　與清

水辺花

此のはなにちる花をとひておなしはるまつさくらかけそをちしを　總義

いつまでみる桜のみかけのいけるのかにさくらにかゝる　子川

氷井茶

やまりつまてやさくら人きえてはるのやまもさかりなき　陸道

舟中見花

咲にほふ山さくらちるもとこゝろあかるしうれなまく　與清

大井川に舟うけて

大ゐはなかれのかけとめて花にかゝる舟にちるひかれ　柳子

名所花

さかりやさくらみれけしいまをみちるを山の峰をおちてる　武陳

御つゝしのさかりを

さかりの山茶かかりにこえゆきてまちのひけしにちりしらま　宗輔

庵花

ふく風に枝をさかりきぬわかるのみきしのさかりいまさかりなれ　元吉

うきなかくれみちてかたき山院のほかしはなるれさくらなかりけり　真澄

古寺花

花なれやかねのひゝきも雲はらくへかさねしみ跡もしらくも　政德

入相のかねよりさきにちらせてもにまさりしさのやま　直温

山家花

山かけはむらもかひなれやよし山やまかけのきてみる　重固

さふくはなき山さと見さくらなりけりひとのみはなくしき林　大秀

かはそめにみよし人はとゝとひてはなるさくらかなかれ　順吉

しくれみかくまやまにさくさくらは花とけかれとはと人はなし

なくそみ花にまれさきたるつき山花に

みのつらゆきかふ人やとまるらんなくそれ世花ときのさかりは　春木

旅宿花

一夜かるたひのまくらにかをりしはなの袖さくかとしるき井のさと　貞暉

松間花

木のまわにちるさくらようつろひて松もはなたなる色にそめし千鳥　流阿

弥生かすみにくもつらひて松ときくわてうてにみけれ

やいつくそなとめつとりふとさとさむる　寛光

惜花

かけちるまいとしきくとおきあおりしおくなる花のこのもと　俊流

落花

花ハ根にかへるなれしひとはれてはらつらふいろれとし海のかゆ　春磨

あくるあさてひとの袖なりめちふしきなみくちれう色かなな　興清

をしと思ふ心につれなくちるをはいねたしや嵐ふかさらなん　光敏

さくら花をしむこゝろは人ならぬ風にそへてちれ　正之

ふく風はなさけなくしも花ちらすやうつろふはなのなさけなるらん　與清

水落花

さそはれし花は心にまかせたるかなまたなかれても猶おもしろ　寛光

花随風

つひにゆくさきはゆくへもしらすの風にまかせてまたかはかなし　景寛

落花随風

ちる花はさそふあらしのあとにみえてきのふの木にかゝれるわ　季鷹

風前落花

山風はたゆめとやむこゝろゆくゑもみゆるのちるのさそはれる　寛長

無風花散

風まかせとめしはやまかけちるさくらのなさけしらすみもみえまかふ森　常之

庭落花

心ありて桜はうつろふたちぬれはさきのみゆるしにさかはおそからし　尚絅

掃花

はらはゝみなちりつもりぬるはなもちりかてゝ庭のにしきはなねさなから　重喬

園落花

うつろひしなほちる庭のなさけありおもしろくかせやとれのみなかれて　政辰

水上落花

ちるときはとちもしらぬさかえをはこの坂の雲ひるまはいのちもあやなみちぬ　春庭

川落花

ちりかゝるみなかみはかけなくてはしりにつゝるさくらのいろかな　子川

風ふきて袖にもしいそまし此川花はよにくたちなかし

山にて花見かへる　我孫良

ちかるきしさゆくをいそきてにさへかしみて宮のとからの名になりぬらん

花散春雨　信子

ときうえきく人のためえてちらくにさそふ雨のちるそのをとけき

花猿　政滋良

のとかなる春のいをゆふくわかためてさそふらにきうらいさくふくそみれ

雲花猿　有倫

ふいくはちかにふれりんかひろろとちるのかすみとちそめしよわ

清保の志賀の山越しかるかる　寛光

仙人のひかわたつねしころちして花のちるさしかの山ここん　寛也

春田

芳のつくたよまくころをちるのかわそこうちかへに春のみたを田　春雄

春の野に付そひて

はみのつきさいかつまつみつくはみかけあるのくに林このみてる　生洋

春日

うらくとくるまもちいらちかすむをむ芳のたかきひのかけ

遅日　政滋良

芳のねのたかきさくら山にかゝるへなきいとのゆけかたは限りてあれ

三月三日　讃岐

桃のさかりさくや陽生のこかさはわひるよにくもれかけとみすまて

上巳禊　彦麿

きよ人の身をとかてよのやせきあらんにさくらはおのれをとふる

曲水　寛光

さかつきいよとまてとるやおやゝゐにころ持てくよらかふとれ暮

さく桃のかけゆく浪のまつきれ月さくこつくさるのくれ

梨の花のかたにちる扇にゐかきそてまとくれくるま　子川

さんかまき風のやとわれ扇にもちるとをすし花のかのめし

春日遠山

のとかなるよそのひくらしなかめてハはるかにいつれにかすみたなひく　徳風

ひろれ雪きえゆくまゝはいまつみれはむかつきかみれやまかにやかな　我喜

にみれとつむ　世浚

もろきれハすみれくさつむのにきてつみはくれはふくるれいのくさき　長温

名不菫

はるの野のすみれはおく露の玉の様おやまけくさ深し

感應されあまくもそにほれをつみてかつるとてあるし　寛光

れそ一つのとくいひいれなる

つとめそし深のちかにはるそつみそたへまま宍にくひてよ

蛙　拾海良

かはつ山たかねすむ月かけれさつくれ田のなにかそつなくかな

花ちかたるみに啼のなくまさ　通顕

ゆふにさうはちかて赤の名のかゝるまそやとしとたゝむ　菅雄

躑躅

まつ柳れかつらにかゝそてくれなゐといひてし庵れさかやこのたれ　厚

松下躑躅

入日さしをさ山すつれそたつしもみゆきまでにまかふところかな　長温

杜若

姿かくれにさけるはれかきつくさつふるにみえしるかれ　徳風

欲名

下葉れゆきめくれてにみそしかも名にたかれたるみよれ山路　長温

宮欲名

すみれはきしれやまふきさくころは家々かこつまさやかへすし　元吉

田家欲名

門田なる苗代水にかけみえてさなへはやなれやまゆき　定彰

名所欲名

かくつゝくみそめぬまたはにきそされハひとへハちらぬやまぶきの花　古道

松欵冬

ゆくはるを惜といはねの山ぶきはなをれのそでにかゝるしほるゝ

山吹のちるをとみて　寛長

言はぬやかそひとくるよなかめつゝハるの山吹はちかふそめて今は

藤　寛光

いろもかもえならぬるのまちなみにはなくさかゆる松ひ入ある

江藤　翔之

ほまれあるなさくもろしにさくらんいろもゆかしえにしなみて

岸藤　元吉

はるかしのきしのひめまつかきいろになりてかゝる藤なみ

藤松掛花　れつ子

ふかみどりまつにまひきはなきれいろはかしこふちの花ぶさ

社頭藤　喜麿

神垣の朱とらひそ山ぶきはなゆるはふちの花にそ有ける

暮春霞　久栽

山ひめのきたかくしまのちるかたちみちかうかやかたまふらん

暮春欵冬　雅之

なかれゆくちるせきとめるしからみやほうまさけるやまぶきの花

暮春雪　千川

さくらちるかたな山かりしもちるふみてやしうらひにたあらなん

暮春蛙　原相

くれてゆく春のなはもと山吹の花にかへりてかはつなくかな　宜風

もちまちりてうれのおもと出されたをむつかのかげにかはづなくなり　久栽

暮春暁月

さくらちるころとをにつほむろめのつきくのかけにかすれかへかな　茂雄

やよひのまかのれへいまかるくへに

ゑかゝみたつなかせるふきさとを見るくいそくはちりんさくら花

三月盡　常之

雲ともみし山のさくらは花かけは雲にのこしてさそふてくれゆく

長温

たつ子らとおなしあかれなすさへくれゆく春をとへるそさくめね

春野　寛光

かはたのとかへれまくろ子たちてはるかかくれにきいちわれなわ

春田　寛長

おのつからねまくころとちつれけわかなまちかへにさるのをちと田

春寺　那須良

まとふかくれはすんへめおなみちかこれんてれやまてゝ

春獣　寛光

ちるさくらのにはきおやしくさる宮たくすむ庵れめつゝし花かな

山家春　本孝

まちまわれころ海かものはましかなおしあかなきやままさとの春

山家春鳥　寛光

そらたかくなひはかれる雲著きへちくやまのきられやまさと

閑居春　長淑

さるをいつくさころはそくられとなにのかれぬよときふれやと

春山里にいきて　寛光

きのしくらふわれとその横かすみ立にそ似さる春のやまはと

海辺春　元吉

若よかえいそちのみとわ波れるひまおきさるれいろれ渋かを

海辺春興　国仲

またのはゝ千鳥かいてさるくとかすみにたわれ沖つしら浪

江上春望　大平

ゆきまるさいくねと侍まるえかへわらやとさかわにかれむさるかな

ゑへく春も見　貞暉

すみてし影くれのしろ木間ここえてかすみ見たれまちられけり

春遠情　久義

こゝにしてまつはるかなるそらをこひしかけにこそあれ

春述懐　千川

たちきそれいつれのそぬれきなくさしたゝ一重八重よみゆけて

春雑　安守

わにあへはなるのかきねの花かけにさくやたちつゝあかぬけれとそみる

賭弓　光英

大きみのちかきまもりの梓弓たゝまちえたるまとのおとかな

仲春　寛光

うちむれて杉のなかさしそのむ坂なるひとかたはいつかさえなき

野洲良

霞やとみ梅はちりにきみよしみ山かけころもみよしたくまし

孫生　尚洞

ゆく水もちかしく花にせかれつゝなをまさつふかくこゆる山川

春日祭　定保

さかむかさん蔭のしるしなひのたまくに神もかひけといはふなる人

春祝　宣風

百年や大こゝや人のきみか代をいはふとさやさるれさつさなは

草縁集巻第三終